

何のために死ぬるか？

日常の世界では「何のために生きるのか？」と自分に問いかけて、人生の進路を決めます。しかし、戦場では逆です。「俺は何のために死ぬるか？」です。行き着く答えは「家族を守るため、国のため、共に闘う仲間のために」という絆です。自分のことだけを考えるなら、死ぬ意味を見つけられません。きっと逃げ回るか、絶望して自暴自棄になって人生を諦めるしかないでしょう。日本は平和ですから、皆さんは死に直面していません。「何のために死ぬか？」と問いかけたこともないでしょう。しかし、永遠という長い物差しで測れば一日も80年も似たようなものです。人生を振りかえれば一瞬、一日の旅と同じです。

死は突然やってきます。自分中心に生きていると、死を受け入れることができません。不安と絶望に襲われます。人生を家族のため、友のため、社会のために捧げてきた人は、穏やかな心で死を迎えるでしょう。よく生きるとは、よく死を迎えることです。戦場では生き残るために戦いますが、死を覚悟しなければ戦えません。人生も同じです。死の向こうに永遠の命を信じ、神を信じて、人々のために命を捧げる覚悟がなければ、よく生きることが出来ません。

死をおそれるな！

「男子、死ぬべき所はどこか？ (…) ついに死を発見した。死は好むものではなく、また憎むべきものでもない。世の中には生き長らえて心が死んでいる者があるかと思えば、その身は滅んでも魂が存する者もいる。」吉田松陰が高杉晋作に宛てた遺言にある言葉です。現代人は間違いなく死を恐れています。死を先延ばしするためあらゆる手を尽くしながら健康に気を付けていても、いつか必ず死にます。死に勝つことは出来ません。だから知らない振りを決め込んで、今だけ楽しんで生きる道を選んでいきます。心が死んでいるみたいです。松陰が言うように、死は恐れるものでもなく、望むものでもありません。続きの言葉を見ましょう。「不朽の見込みあらば、いつ死んでもよし。そして大業を成し遂げる見込みあらば、いつまでも生きてらよいのである。(…) 人間とは、生死を度外視して、成すべきことを成す心構えこそが大切である。」聖ホセマリアも同じことを教えています。「(好き嫌い、損得、やる気があるかないか、関係なしに) すべきことを果しなさい！」

人生には春夏秋冬があります。みなさんは春の時期です。青春と言いますね。私は秋の時代を生きています。白秋といいます。各季節にすべきことがあります。

す。春には種を播いて、夏には苗を植え、秋には刈り取り、冬にはそれを貯蔵する。農民は労働の実りを喜び、自然に感謝して、酒を造り、神を寿ぎ、共に祝う。一年を終わって悲しむ農夫がいるでしょうか。誰もいません。人生もこれと同じです。なぜ、人生が終わることを恐れるのですか？むしろ人生が完成して、実りがもたらされたことを喜び、感謝して、神と共に祝うべきではないでしょうか？再び松陰の最期の言葉です。「30歳の死を短しとせず。人生の春夏秋冬を完結させるべし。(…)私自身、今が花咲き、実りを迎えた時なのである」(牢獄で書き留めた遺言『留魂録』より)。

人生は「死刑囚」に似ている

知り合いが癌で亡くなりました。71歳でした。、医者から余命一ヶ月と宣告され、最期の心境を教会の月報の記事に残しました。「洗礼を受ける前は、死を思うと不安になり、怖くなり、考えないようにしていましたが、今は、神の手に自分を委ねればよいと思えます。強がりではありません。正直な気持ちです」。10年前に奥様の影響で洗礼を受けていました。そのことを心から感謝して、神様の望まれる生き方をしたいと、退職後はボランティア活動に精を出し、人を助けることを大切に生きて来られました。だから、死を前にしても落ち着きと平和な心でいられたのでしょう。

記事は続きます。「今の私は、考えてみれば死刑囚と同じです。独房に入れられ、どこにも行けず、誰とも会えず、一日を過ごし、明日は死ぬかもしれないと思い、眠りに就きます」。信仰があれば、神に祈り、死後の世界に想いを馳せる楽しみがありますが、信仰がなければ、日々の暮らしは死刑そのものよりも苦しいでしょう。生きる希望がないのですから。「私は思います。癌で余命を宣告されなくても、人間は必ず死にます。死を宣告されているのと同じです。それがいつかも知りません。明日かも知れないのです。これは死刑囚と同じです」。多くの人は死を忘れているだけで、死刑囚と同じ状況にいることに気づいていないのです。

ある高名なお医者さんが、常々言っていました。「私が癌になったら、必ず余命を宣告してほしい。残された日々を活用して、旅行をして、友と語り、美味しい食事をして、楽しんでから死にたいから」。はたして、癌になり、主治医から余命 1 カ月と宣告されました。そのお医者さんは、その日の晩に自ら命を断ちました。死と向き合うと、この世の楽しみを楽しめないのです。生きる希望が無いので、何をしても虚しく感じるのです。それまで死に背を向けてこの世を楽しんできたからです。それは死に通用しません。■(小寺神父)